

犯罪被害者等の手記

第5集



秋 田 県
秋 田 県 警 察
(公社) 秋田被害者支援センター

はじめに

「犯罪被害者等の手記第5集」は、犯罪被害者や被害者遺族の五人の皆様にご協力いただき、この度、発行させていただくことができました。

寄稿された皆様は、事故や事件に遭われた悲しみ、苦しみを綴ってくださいっております。皆様
が受けた悲惨な事件や事故の衝撃は大きく、それを抱えながら生きることが、私たちの想像を絶
することでしょう。しかし、その一方で、絶望の中から見いだした微かな光についても語ってい
ただいております。事件事故当初からの変わらぬ思いと現在の変わりつつある思いに触れてい
だきたいと存じます。

秋田県では、令和三年に「第4次秋田県犯罪被害者等支援基本計画」を策定し、被害に遭われ
た方々を支える地域社会の形成を図っております。犯罪被害者等の支援は、その思いを知ること
からはじまります。県民の皆様には、ぜひこの手記を手にとっていただき、改めて一人一人の命
の重さを感じるとともに、犯罪被害者支援の輪が広がることを願って止みません。

最後に、手記を綴るために、自らの被害に改めて向き合ってくださいました五人の皆様に対し、心
から敬意と感謝を申し上げます。

※手記は原文のまま掲載しております。

令和五年十一月

秋 田 県 警 察 長
秋 田 県 警 察 長

(公社)秋田被害者支援センター

目次

一	これからもずっと……	上杉芳則・春美	1
二	メンタルヘルス障害と共に歩む……	匿名	4
三	心の中の姉と共に……	藤村恵子	7
四	未来を奪われた娘を想う……	三浦芳子	14
五	被害にあったことのある方へ……	安部有紀	17

これからずっと・・・

上 杉 芳 則
春 美

ひまわりが揺れる八月の暑い時に私たちの長男、優弥^{ゆうや}は一人旅立ってしまいました。

ひまわりの様にまっすぐで、はにかむ笑顔の優弥。

もう二度と帰って来る事も触れる事も言葉を交わす事も出来ません。

八月は私たちにとって、辛く悲しい季節です。

二〇一一年八月十二日二十二時十六分頃、秋田市河辺の国道十三号線で、軽自動車がセンターラインを超えて対向して来た大型トラックと正面衝突をしました。

友達が運転する軽自動車の助手席に、優弥

が乗っていて事故に遭いました。

事故の原因は、運転していた友達の居眠り運転とみられました。

この知らせのほんの数分前に、主人は優弥と電話で話をしていました。

これが主人にとって優弥との最後の会話になるなんて思いもせずに。

電話を切った数分後に事故に遭いました。

優弥は、大学病院で懸命な治療を受けましたが、三日後には脳死、九日後に息を引き取りました。

大学二年生の夏、十九歳十一月

もう少しで二十歳になるはずでした。

たった一つの不注意で、優弥の大切な命、

そして優弥に関わる人の未来までも変えてしまったのです。

人はよく時間が解決してくれるとか、時間がたつたから少しは悲しい気持ちも和らぐとか、いろいろ思っているようです。

それは、私たちが普通に生活しているのを見ていて、きっとそう感じるのかも知れません。

でもそれは、そう見えているだけで、事故の時から時間は止まっています。

家族の中にいるはずだった優弥がいない現実、日々思い知らされます。

過去、現在、未来、私たちにとってはどれも悲しい言葉でしかありません。

優弥と会えるのは過去だけです。

その過去も十二年も前の十九歳で止まったままの優弥。

現在では、「もし優弥がいたら…」と、

想像する事しか出来なくて。

今、生きていたら三十二歳。

どう成長しているのか想像するのも難しくなってきました。

優弥との未来を思い描く事もあります。

結婚して子供が生まれてごく普通の未来だったとしても、現実になることはない、悲しい予想図でしかありません。

今も優弥の部屋、使っていた物は全て当時のままです。

お茶碗も箸もコップも歯ブラシも服も靴もサッカーボールもサッカーシューズもユニフォームも、優弥を今でも待っているようで。

でも優弥だけがそこにはいません。

名前を呼んでみても返事がありません。

突然家族を奪われることの壮絶な思いを、自分の家族に当てはめて考えてみて下さい。

交通事故だから仕方ないと思う人が多い中、本当にそう思えますか。

他人の不注意で大切な人の命と未来を奪われて。

一番の被害者の優弥は、何一つ伝えることが出来ないのです。

交通事故は、私たちの生活のすぐ隣にあります。

誰にでも起こり得る事なのです。

皆さんが交通ルールを守って、運転する時には大切な人の命を預かっている事を忘れないで欲しいと思います。

それだけで、痛ましい事故も減ると思います。

私たちのような交通事故遺族を増やさない為にも、そして何より大切な家族を失わない為にもお願いします。

たったひとつの大切な命。

今、こうして生きていられる事、明日を迎えられる事、本当は奇跡なのかも知れません。

私たち家族は、これからも優弥を想い一緒に一日一日を大切に過ごしていきたいと思っています。

楽しかった日々をありがとう。

これからもみんなの心の中でずっとずっと生き続けているよ。

出来る事ならもう一度会って抱きしめて私たちの子供に生まれてきてくれて、「ありがとう。」って伝えたい。



優弥のサッカーボールとシューズ

メンタルヘルス障害と共に歩む

匿 名

母の親族・親戚（母の実家、子供及び本家・分家の方々）に案内を送り、十三回忌法要の準備をしていた。新型コロナウイルス感染が新聞、テレビ、インターネット等でトッ

プニュースとして連日取り上げられ、遠方に住む私の兄弟には来秋を控えるように連絡せざるを得なかった。更に隣接自治体内で感染者が発生したことで、リスクを考慮し、親族・親戚を招いての法要は中止した。法要を予定していた日時に菩提寺に妻と出向き、読経と共に供養し墓参りを済ませた。

二〇〇X年Y月Z日、母は、国道××号線横断中にわき見運転していた車の犠牲になった。事故後に救急車で病院に搬送され治療を

受けたが、家族や親戚の看護・付き添い・励ましの甲斐もなく事故から十二、三時間後にICUで臨終を迎えた。

今でも事故当日のICU (Intensive Care Unit 集中治療室) での出来事が蘇る。映像媒体に接し、考えごとをしていると侵入現象に襲われることがあり、完治・寛解してないことに落胆する。

事故後、心身に今まで経験したことがない次の現象・症状等が現れるようになった。

微かだが鋭い金属音が聞こえる

腕・首・目・耳周辺に湿疹が出る

足が氷のように冷たいのに背中にくっしょ

り汗をかく

映像媒体に接している時や花輪等仏事関連物を目にとすると頭が重苦しくなる

また、運転中の接触事故や農機具に足が巻き込まれ靱帯損傷の怪我也あった。これらは不注意によるものと考えられがちだが、瞬間的な意識変容が影響しているようだった。

P C画面を眺めながら考えごとをしていた時やテレビドラマを観ている時に、衝撃的風圧により転倒しかけたこともある。

事故後にこのような精神的異常・不安が続き、心療内科を受診していた。しかしながら、心身の現象・症状を適切に伝えきれない期間が続いた。主治医に事故時の詳細（I C Uでの出来事や事故後の心身の症状・変化）を整理し伝え、P T S D（Post Traumatic Stress Disorder 心的外傷後ストレス障害）であることが判明したのは三回忌近くになっていた。自分の意思とは関係なく発生する奇

妙な症状を懸念し、かなり緊張した日々が続いていたように感じる。事故後、仕事にも支障をきたすことが増え、三か月間の休職をした。復職したものの期待したような症状の改善はなく、職務上の支障も続き、再び休職し自宅療養せざるを得なくなった。定年退職日を自宅で迎えたのは非常に無念であった。

一方、初期の頃は毎週のように通院していたが、何となく罪悪感みたいなものがあり、病院内外で知人に顔を見られるのが辛かった。隔週、毎月と頻度を減らしながらも通院は数年間続いた。通院時の処方薬はプラス効果だけとは限らず、また、薬だけに頼るリスクを考慮し、主治医と相談しながら服用する量・頻度を減らしていった。映像媒体への抵抗力をつけ、侵入現象不安を解消するため、休憩を挟みながらのP C画面に向き合う自分なりのリハビリテーションを実行するようになった。このリハビリテーションは現在も継続中だが、年に何度か侵入現象に襲われ

る。

事故後に体重も減った。兄弟、友人、知人に「痩せたね」と言われる。痩せた理由は言わない。愛想笑いで誤魔化している。たんぱく質を多く含む食事を心掛けているが、事故前の体重に戻る気配はない。

メンタルヘルス障害は目に見えない。理解を示す人は少なく、これらの症状が発生しても気分転換し緩和するのを待つしかなかった。職場ではさぼっている、または能力がないとみられているようで辛かった。意識変容は第三者を巻き込む可能性もあり、恐怖を感じるようになった。車の運転は可能な限り控えるようにし、車を手放す決断をした。映像媒体の影響を考慮し、集中してテレビを観ることを避けている。テレビを観るのは週に一時間半位である。

主治医やカウンセラーのアドバイスに基づいた生活や自分なりのリハビリテーションを

継続することにより、二〇二一年以降になって、このようなメンタルヘルス障害が緩和し、発症前に近い状態が続くようになったような気がする。しかし、油断はできない。PC画面を眺めながら考えことをしていると、未だに頭が重苦しくなることがある。

今後も映像媒体や意識変容の影響は続くものと考え、少しでも回避できるような生活をしたいと思う今日この頃である。



心の中の姉と共に

藤村 恵子

二人姉妹のたった一人の最愛の姉が、二〇一六年十月二十一日に、交通事故で命を奪われました。

当日、姉はナレーションの仕事で岩手へ向かう為、仕事の依頼元で秋田市内にあるイベント会社から、イベント会社の社員だった当時二十代前半の加害者が運転するハイエースに乗車しました。姉が、加害者の運転する車両に乗るのは、その日が初めてでした。姉は、後部座席に乗車しましたが、そのハイエースの後部座席には、シートベルトの設置がありませんでした。

「行つて来ます」といつものように笑顔で出掛けた姉が、出発から一時間も経たない午

前八時五十七分に、協和の国道四十六号線で事故に遭いました。姉が乗車するハイエースを運転していた加害者が、緩やかなカーブが終わり直線にさしかかった際、対向車線に入してそのまま逆走し、対向車線を走行してきた十三トンの大型トラックと正面衝突したのです。

加害者は、ブレーキを一切かける事なく、時速約六十キロで大型トラックに衝突し、ハイエースの前方は大破しました。大型トラックを運転していた方は、急ブレーキをかけ、時速約二十キロまで速度を落とし、左にハンドルも切りましたが、雪除けの柵があり、少ししかハンドルを切る事ができなかったそうです。大型トラックを運転していた方も、

骨折の重傷を負わせられ、大型トラックは廃車になったそうです。それ程の凄惨な事故に、姉は巻き込まれたのです。大型トラックが迫ってくる時、姉はどれ程の恐怖だったでしょうか。

後部座席に座りシートベルトが無かった姉は、意識不明の重体で、救急車で最寄りの病院へ搬送されました。頭蓋骨骨折、頸椎骨折、肋骨は全て折れ、右腕と右脚も骨折し、出血多量で輸血を受けましたが、手の施しようが無かったと医師から告げられました。加害者は、事故当時話せる状態だったそうですが、ドクターヘリで秋田市内の病院へ搬送されたそうです。姉は、大怪我を負い意識が無い中でも、三時間四十分の間、両親と私の到着を待っていたのです。

当時、県外に住んでいた私は、仕事中に父から姉の事故の知らせを受け、突然の事に信じられず、体の震えが止まりませんでした。

危険な状態としか知らされなかった私は、少しでも姉が軽い怪我であるようにと祈りながら、すぐに新幹線でかけつけました。新幹線は満席で、角館駅までデッキに立ち、私の携帯電話が終始繋がらなかった為、両親に連絡を取る事もできず、ただただ姉の無事を祈る事しかできませんでした。

角館駅に到着する寸前に、やっと母と連絡が取れ、姉が亡くなった事を知らされました。思いもしない訃報に、私はその場に崩れ落ちました。秋田市内からかけつけた両親でさえ、姉を看取る事はできませんでした。

病院には、包帯が何重にも巻かれ、変わり果てた姉が横たわっていました。頭は膨らんでいて、大怪我を負わされた事がわかりました。私は、姉の手を取り、「痛かったね」と泣き崩れました。あまりに突然の出来事に、姉を目の前にしても、姉の死を受け入れる事は全くできませんでした。顔だけは、かすり

傷だけで、顔だけ見るとまるで眠っているかのようにでした。

父は、「愛子、寝てないで早く家に帰ろう。」と言いました。何も答えてくれない姉に、胸が張り裂けそうでした。

何かの間違いではないのか、なぜ姉がこんな目に遭わなければならないのか。現実を受け止める事は、できませんでした。

姉の顔が、どんどん冷たくなり硬直していききました。この姿は、本当に姉なのだろうか。姉は、あんなに元気だったのに。

ただ姉のそばに居る事しかできず、涙が止まりませんでした。朝まで一睡もできませんでした。

その日を境に、私達家族の人生が一変しました。

現実を受け入れられないまま、あんなに元気だったまだ若い姉の葬儀を執り行わなければならない事に、笑顔の姉の遺影を見て涙が

止まらず、言葉に言い表せない哀しみで心が押しつぶされました。

笑顔の姉が居るのではないかと、何度も姉の姿を探しました。笑顔の姉の姿が頭に焼き付き離れませんでした。その時は、あまりの衝撃と哀しみで絶望しかなく、加害者への怒りが湧く気力もありませんでした。

皆は、変わらない日々を過ごしているのに、私達だけが暗闇に取り残されているような気持ちでした。

葬儀を終え帰宅すると、冷蔵庫に姉が作った料理が入っていました。

両親と、「もう二度と食べられないから。」と嘔みしめて食べました。涙が溢れました。

後日、私達の手元に戻ってきた姉のバッグには、ガラスの破片がたくさん入っていて、姉のストールは、血で染まっていました。姉をこのような悲惨な目に遭わせ、姉のたつた

一度きりの人生を奪った加害者への憎しみが、日に日に強まっていきました。

いつものように笑顔で姉が帰って来るのではないかと、玄関に姉の姿を探す毎日でした。姉がいつも座っていた席には、もう姉は居ません。何も要らないから、ただ元氣な姉を返して欲しい。現実と心が追いつかず、現実を受け止められない日々でした。

姉は、何事にもストイックに取り組み、決してネガティブな発言はしませんでした。穏やかで気配りができ、芯が強く行動力のある頼もしい姉でした。私も両親も、姉をとて頼りにしていました。姉の居ない人生は、考えられませんでした。

長生きしたいと言っていた姉は、健康にも人一倍気を付け、無添加の安全安心な物を選び、食事も手作りにこだわっていました。

料理が得意な姉は、いつも美味しい料理やお菓子を作ってくれました。特に、焼きたて

のパンやケーキを、私も両親もとても楽しみにしていました。お互い離れて暮らしていても、毎日メールで情報交換をして、友達のような存在でもありました。

二人で旅行に行った時、「私達は、またいつでも一緒に来られるから、今度は両親を連れて来たいね。」と話していました。まさか、年齢的に一番長く一緒に居られると思っていた元氣な姉が、突然命を奪われるとは思いませんでした。

私が、最後に姉に会ったのは、事故の二か月前でした。帰省していた私を、姉が駅まで車で送ってくれ、「次は年末ね。気を付けて帰ってね。」と笑顔で手を振る姉が、私に最後に見た姉の姿です。

姉と話したい事、行きたいところがたくさんありました。数か月後の、姉の誕生日プレゼントも決めていました。翌年の大曲の花火も、また一緒に行く約束をしていました。

姉のスケジュール帳には、今後の予定がぎつしりと書きこまれていました。まだまだ、仕事でもプライベートでも、目標がたくさんある姉でした。突然命を奪われ、どれ程無念だったでしょうか。

姉の事を想い、眠れない日々、何度も目が覚める日々が続きました。目が覚める度に、姉が居ないのは夢ではないという大きな哀しみと喪失感で胸が張り裂けそうで、涙が溢れました。たまに夢に出てきてくれる姉は、いつもと変わらず笑顔の姉なのです。夢で会えた嬉しさと、夢でしか会えない哀しきで遣りきれませんでした。

姉妹を見かけると、なぜ私の姉は居ないのだろうかと、哀しくて苦しいです。他の人達が、とても幸せそうに見えました。「兄弟は居るの？」と聞かれる事が、嫌になりました。加害者に、私達の全てを奪われました。

姉と私達の無念を少しでも晴らす為にも、加害者がなぜ事故を起こしたのか真相を知り

たい、加害者を厳罰に処してもらいたいという思いだけで生きていました。哀しい、苦しい、悔しいという感情しか無くなっていました。

加害者は、私達が日々どのような想いで生きているのか考えた事はあるのだろうか、自宅で家族と過ごせる加害者には、憎しみと怒りしかありませんでした。悔しくて堪りませんでした。

姉が亡くなってから半年も経たないうちに、妹のように可愛がっていた愛犬も、姉の後を追うように突然亡くなってしまいました。突然姉と、妹のような存在だった愛犬が亡くなり、大きな喪失感と哀しめで、ただただ泣いて過ごす日々でした。

姉と愛犬とは、よく一緒に散歩に出掛け、季節の花を見て楽しい時間を過ごしていました。そんな日常が、とても幸せだった事を痛感しました。

当たり前の日常、変わらない日常、そんな普段は当然の事が、本当はとても幸せな事なのです。

姉が亡くなってからは、外出する事さえ恐ろしくなりました。車も、しばらくは運転する事ができませんでした。歩いていても、いつどこから加害者のように前を見ずに運転している車両が突っ込んでくるかわからないと不安になりました。生と死は、隣り合わせなのだと感じました。

遺族が心穏やかに暮らせるようになるまでは、随分と時間が掛かります。私は、裁判が終わり三年が過ぎた頃に、やっと自分に目を向ける事ができるようになりました。それまでは、今振り返っても覚えていない位、生きているだけで精一杯で、暗闇でもがき続けている日々でした。

加害者は、これまでの七年間、どのように自分が犯した罪と向き合い、この先どのような

に生きていくのかは、私にはわかりません。姉のたつた一度きりの人生を奪った事、私達家族の人生を一変させた事を、一生忘れないでください。

もし、加害者が逆の立場だったら、加害者の家族が同じ目に遭ったらどう思うか、考えてください。私達は、どんなに願っても、もう二度と姉に会う事はできないのです。

私達が、姉を亡くした哀しみ、苦しみは一生続きます。

交通事故は、いつ誰の身に起きるかわかりません。ドライバーの皆さんが、安全運転の意識を改め、私達のような想いをする方が減る事を願っています。

もし、姉が生きていたら、今私達はどのように暮らしていたのだろう、姉は何をしていたのだろうと考えます。家族それぞれ、とても幸せに暮らしていたはずです。

姉の誕生日や命日には、姉の友人から連絡をもらったり、姉の友人が帰省した際には姉のお墓参りに行ってくれます。

こうして、姉が亡くなった後も、私達の心の中で姉は生き続けています。

哀しみと苦しみを抱えながら、生きたかった姉の分も、心の中の姉と共に歩んでいきます。



愛犬 ハナ

未来を奪われた娘を想う

毎日のように起きている交通事故、件数や死者数は減っているという統計を目にします。しかし、日々の犠牲者はゼロにはなっていません。

二〇〇一年四月二十日、大切に育ててきた娘・芳代子^{かよこ}も交通事故犠牲者になってしまいました。この日の朝、いつも通りに自転車で大学に出かけて行った娘は、帰宅途中に青信号の交差点を横断中、十トントラック運転手の脇見運転によって轢かれ、ほぼ即死でした。当時大学三年生になってまもなくです。加害者は、プロの職業ドライバーでありながら寝坊の常習で、あの日も配達時間に間に合わず慌てていたと聞きました。うっかり、ぼんやりで簡単に娘の未来を奪ってしまったの

です。

様々な乗り物は、私達の日常生活にはとても便利ですが、ほんの少しの油断で、人の命を奪ってしまう危険性がある事を忘れないで頂きたいです。社会では、安全運転への啓蒙、さらには自転車や歩行者それぞれに注意喚起がなされ、事故防止の為の様々な取り組みがなされてきました。にもかかわらず、悲惨な事故が起きています。どんな乗り物も人が操作する物です。飲酒運転、スピード超過、あおり運転など安全意識が欠けている人もおられます。まさに事故ではなく交通犯罪なのです。

娘を亡くした当時、「運が悪かった」とか「事故だから仕方が無い」などという言葉も耳

三 浦 芳 子

にしました。あまりにも多い交通事故を他人事と捉えているのかも知れません。誰もが被害者や加害者になるかも知れないという意識を持って頂きたいです。

娘と一緒に穏やかに暮らしたのは、二十十年か月ほどです。そして、突然の別れから始まった混乱の日々は、終わりの見えない暗いどん底でした。当時はまだ、犯罪被害者等を支援する環境が整っていませんでした。葬儀後から、様々な手続きや加害者の処罰に関する法的な対応など、知識も情報も無いままに、ただ動き回っているような感覚で、心身共に限界を超えていました。

娘の死後しばらくして、県内外の被害者遺族達と知り合うようになりました。当事者同士だからこそわかり合える安心感があり、大きな支えになりました。孤立した状況の中では、誰かと繋がる事がとても大きな力になると実感しました。このような被害者同士の支え合いと同時に必要なのが、第三者による支

援です。今は、犯罪被害者等を支援する窓口が設置されております。ただ、当事者が窓口に関する情報を持つているとは限りませんし、自ら行動するには、かなりの気力や労力が必要です。相談機関からの積極的なアプローチをお願いしたいものです。それから、社会全体での支援が広がって欲しいですし、特に身近な地域の方々の犯罪被害者等に対しての理解も広がるよう願っております。

娘が亡くなってから二十二年が経ち、会えなくなつた歳月がどんどん増えるばかりです。娘を忘れた日はありません。その時々で折り合いをつけながら生きられるようになってたとは言え、会いたい気持ちに変わりは無く、時にはあの日に引き戻されるほどの苦しさに襲われたりします。「娘がいない生活」に慣れはありません。「もし娘が生きていたら……」と何度も思います。短い人生は学生時代で終わってしまいました。

二〇〇二年秋田市で開催された「いのち生命のメ

ッセージ展」開催期間中に、娘の友達が娘宛てに書いて下さった手紙を読みました。娘は仲間達からも信頼をされ、悩み相談を受けて一緒に考えてあげたり、学んでいた心理学研究室では学年を超えての交流に一役買ったたり等々、「カヨちゃんがいてくれて良かった」と書かれた手紙がたくさんありました。将来は、図書館の司書や教師になりたいと資格も取れるように頑張っていました。しかし、今となつては、どんな職業に就き、どんな人生を送っていたか何もわかりません。突然、未来を奪われた娘の無念さを思うとあまりにも残酷です。生きていると楽しい事や辛い事などたくさんありますが、命があるからこそその体験を、まだまだたくさんさせてあげたかったです。

大切な命だからこそ、一人一人が思いやりの心を持つて守っていききたいものです。



いのち
生命のメッセージ展

被害にあったことのある方へ

安部 有紀

どんなことがあっても、あなたは悪くありません

性別なんて関係なくて、

相手が嫌だと思う事はしてはダメなんです

知らない人でも、

自分より立場が弱い相手でも、

恋人でも、

夫婦でも。

突然誰かを襲ったり

むりやり性行為をしたり

傷つく言葉をあびせたり

電車やバスで体を触ったり

こっそり写真をとったり

痴漢なんてだまっていればすむから
セクハラなんてよくあることだから

レイプされたなんて、怖くて、恥ずかしくて言えないから
自分が何か悪かったのかもしれないから

スカートをはいていたから
夜道を歩いていたら

そんな風に思うかもしれない

そんな風に思う事でしか気持ちがおさまらないかもしれない

だけどあなたはなにも悪くありません

絶対に悪くない

怖い想いをずっと抱えて、隠していなくてもいいから

被害に大きいも小さいもないのだから

どうか、あなたが

怖くて、苦しくて、どうしようもない気持ちを

少しおろす場所に出会えますように

親にも友達にも、言にくいことだとは思うけど
こんなことで相談していいのかなって思うかもしれないけど

どこでもいいから、

だれでもいいから

助けてって声をだしてみてほしい



犯罪被害者等の手記 第5集

令和5年11月

- 〒010-8570 秋田市山王四丁目1番1号
秋田県生活環境部県民生活課
- 〒010-0951 秋田市山王四丁目1番5号
秋田県警察本部警務部警務課
- 〒010-0922 秋田市旭北栄町1番5号
公益社団法人 秋田被害者支援センター
-